朝鮮巫俗の研究

赤松智城・秋葉隆共著

文學博士赤松智城・秋葉隆兩教授が滿鮮巫俗の研究、特にその熱心な現地調査を進められて居ることを耳にして以來久しいことであり、またその成果の一端を雜誌や論文集で公表されつゝあつたことも、既に同好學徒の興味深く熟知するところであり、從つてそのまとまつた研究報告の世に出ることを齊しく待望して居た。最近この待望の成果が兩教授の共著として「朝鮮巫俗の研究」上下二卷の堂々たる體裁で出版されたことは、それが兩教授の調査研究のすべてでないにしても、斯界學徒を喜悅せしめるに充分である。これに類するものは、さきに總督府の民間信仰調査資料として、村山智順氏の勞作になる、可なりの數量的な出版物を吾々は持つて居るが、それに比して今回の著作は、專門學者が一々足を運び親しく見聞調査を遂げ、その結果の收錄されたものであり、從つてその資料的價値に於て、先つ學究的に今日までのものは比肩すべくもないと云つて過言ではあるまい。民間信仰資料が往々非專門家の手に成り或は官邊的調査になり勝ちな現狀に於て斯の如き專門學者の現地調査の成果が公にされたことは、單にそる內容からのみならず、研究法上の實例としても深い意義を持つて居る。且本書の成るまでに、この民俗に深い理解と現地調査に多くの經驗を持つ孫晋泰文學士はじめの新進學徒が、兩教授の事業を助けられたことも見落してならない。

扨て本書上下二卷の內、上卷は專ら巫の祭祀卽ち賽神に於いて唱誦される神歌と祝詞とを收錄した資料篇であり、下卷は現地調査に依つて得られた巫俗の全體に亙る研究の諸論文を集成し、且これに參考圖錄を附せられたものである。前者は巫覡の口傳に依つて唱誦されて來た神歌祝詞を、原語のまゝ收錄し、これに邦譯をそへ、且釋註を付してあり、特に巫覡使用の方言を努めて原言のまゝ保存せんとするなど充分な學究的顧慮が拂はれて居る。收められた神歌祝詞は、巫祖傳說(捨姬)、十二祭次、告祀祝願、成造神歌、指頭書、死の語、濟州島神歌、雜篇の諸篇にして地域的には京城、京畿道、忠淸南道、濟州島などの地域の巫覡によつて傳承されたものであり、なほ資料としては下卷に附錄的に收められた巫經及び圖錄も貴重なものである。これらの資料は下卷の諸論文に於ても有效に利用されて居るが、然し恐らくこの資料篇は、今後斯界學徒の利用によつて、其の眞價を愈々發揮するものたるべく、この點吾々の安心して借用し得る民族文獻資料である。

研究篇なる下卷は、全教授の勞作に成る論文十二篇を收め、章を追ふて體系的に配列され、大體前後一貫した形式を備へて居る。斯く形式的には一貫した著作でありながら、兩教授の立場必ずしも同一でなく、赤松教授はその宗教學的關心に於て之を取扱はれ、秋葉教授はその專門とする社會學の見地より巫俗關係の社會を究明せんとされて居る。

先づ秋葉教授の研究に就いて見るに、第一章「巫祖傳說」に於て巫祖傳說の特徵として、巫祖の女性なることを始め三項を指摘し

特に巫祖女性の問題に就いて、女巫先行問題に關心をつなぎながら、女巫の男覡に比して社會的優勢を占めることに應ずる傳說なることを主張されて居る。吾々史家の關心は、巫祖傳說の內容と、それが傳承される社會との機能的關係にあり、右の所論の內には、民族や國家の上代史をなす始祖神話の理解に對する多くの示唆を含んで居る。第二章「巫の呼稱と種類」に於ては、數多い巫の呼稱を吟味し、第三章「入巫過程」では、入巫過程の容態を世襲的入巫、降神的入巫、經濟的入巫などに類別し、その內世襲的入巫の數量的絕對多數より、彼等の社會が家族制度的形象の特に顯著なるを主張され、第五章「薦新賽神の行事」、第六章「家祭の行事」、第七章「村祭の行事」の諸項に於て、家族の祖先祭、祈豐收穫の季節祭及び村落の共同的祭儀などを論考し、特に家祭に關し、その主祭者は多く家巫としての主婦であつて、祭事に招かれた職巫はその補助者であることより、朝鮮巫俗の女性的及び家族主義的特徵を興味深く指摘されて居り、これら各種祭儀に關する論述は、本書の興味ある部分をなして居る。第八章「巫裝と巫具」、第九章「巫歌(と巫經)」は極簡略にされた論述であるが、それは資料的な理由からではなく、かゝる方面の問題に著者の關心が少かつたことに因るものではなかろうか。第十章「巫の家族生活」では、巫家の神堂、巫家の名稱、巫の婚姻、巫女の家族的地位及び宗教的母系など社會的考察の興味ある觀點よりこれを論じ、巫家の母權母系家族的傾向を指摘し、朝鮮の一般的家族の構造が專ら父權的父系的なるに對比して著しい特色を示して居ることを說いて居る。第十一章「巫の社會生活」では、巫團及び丹骨(タンゴル)制度を解說し、それの持つ事大的官尊的なる點、從つて道德法律などの世俗的規範の强く働いて居ることを注意されて居り、そこに朝鮮史的な特異性を見出し得るのは興味深い。以上の諸項が秋葉教授の執筆にかゝるものであるが、今これを通じ見るに、既述の如く、著者の社會學的關心によつてその論旨が特色づけられて居り、かゝる立場より朝鮮巫俗の特性として、傳統的信仰を墨守する保守主義と外來の宗教を習合する寬容なる平和主義との併存を見、且そこに朝鮮社會の農村性及びそれが女性中心的家族主義的色彩を持てることを主張して居る。

赤松教授の第四章「巫俗の神統と聖所」の論旨は次の點にある。卽ち宗教學的關心より、巫現信仰の特性を論じ、萬神とも通稱される朝鮮の巫が殆どその字義通りにその神統 Pantheon の內に雜多の鬼靈や神格を認め、特に道佛二教の强い影響を受け、その習合によつて甚しい混合性 syncretion がその一大特色をなして居る。このことはその巫經の內容によつても窺ひ得る。從つて朝鮮の原始宗教として「原始的一神教」の存在を想定するかの基督教的神學者流の所說は實際上否定されねばならない。しかしその神統の全體を通觀すれば、大體にその間には一方交替一神教的に屢々主神として尊崇される高級な諸神佛と、他方常にそれに隨從するか又はそれ以下に位する低級な諸神靈との差等があることをも知り得、かくして茲に特異な一の複合的神統が構成されてゐると結論されて居る。聖所に關しては巫堂、自然の聖所及び家庭家屋數

の聖所の三種に類別して具體的事例を說明されて居る。家屋敷の聖所は直接巫俗に關するところでないが爲であらうか、その記述を極簡單に止められたが、今後この方面のより詳細な敎示を受ける機會があれば、同好者の裨益を得ること少くはなからう。第十二章「巫俗の道佛二敎との關係」では、巫俗の道佛二敎との習合の深きことを說き、進んで今日の社會問題に言及され、朝鮮巫俗の迷信邪信的弊害を是正し、彼等を善導する根本的一方策として、多少歪曲されてその巫俗中に包容された佛敎的要素をば、巫覡とその信者の間に宜しく正統化して以てこれを所謂眞實敎としての佛敎に更に淨化發展せしめることにあると論じられて居る。

以上簡單に內容の紹介を終へた。數年の現地調査に成る一大勞作を、今僅か机上で一讀したばかりを以て、輕々しく妄評することは寧ろ差控ふべきが至當であらう。たゞ以下一二蜀の言を敢へてし、以て將來の敎示を乞ふことは、先輩精進の成果に甘える所以でもあらう。先づその一は、巫俗文化複合體の各特質に就いての地理的分布上の考察である。卷尾に附せられた現地調査地圖に依れば、その調査地域は廣く全鮮に亙り、それに費された勞力には全く敬服の外ないが、今若しその境域に於て特質分布の問題が示されたならば、巫俗文化の地理的及び歷史的研究上、多くの示唆を得ることが出來たであらう。その第二は、巫覡に直接關係のある事項のみに限らず、これと發生史的に深い關係にあるところの一般民俗 folklore の方面に對する一段の關心をより多く示されたならば、吾々の受け得た敎示にはより意義深いものがあつたであらう。最後に紹介その意を盡さず、評言その正中を得ず、爲に著者に對して非禮を敢へてしたことを多謝しつゝ、なほ祕藏されて居るであらう多くの貴重なる資料を、つゞいて公にされる日の一日も早からんことを念願するものである。（四六倍版、上卷五八〇頁、下卷三二一頁、附錄一一四頁、參考圖錄二〇八圖、地圖一葉、索引四八頁、京城府大阪屋號書店發賣、上卷八圓、下卷拾圓）（三品彰英）

通溝　上卷

池內　宏著

古來韓半島に政治的發展をなしたもの必ずしも少しとはせない。箕子が傳說はしばらくおくも、所謂三韓、三國、或は樂浪、帶方の如き拓植の勢力も亦その一であらう。就中樂浪に於ける漢の帝權と三國にみられる半島の生動は古來その優なるものといふ事ができる。從つて、近時の學的興味又これら諸國諸勢力の研究に牽かるゝ處多く、あるひは文獻的考覈或は則物的理解に於てその進展のいちぢるしきものをみるのである。

こゝにこれらの則物的理解卽ち所謂考古學的理解に於ける諸般の成果をみるに、樂浪遺址における漢時の文物、南しては新羅王朝の燦然たる文化の餘映、北しては高麗に於ける巨大なる墳墓とその丹青、これらに對してやうやく系統的研究の一緖がたぐられ得たといひうる事ができるもの卽ちそれである。こゝに擧げんとする「通溝」なる四六版四倍大の一巨册又その一であつて、著者池